

ペロブスカイト太陽電池を県内で産業化する方法などについて語り合ったパネルディスカッション。新潟市中央区



次世代太陽電池どう生かす？

次世代の太陽電池として期待されるペロブスカイト太陽電池の将来性や、産業の活性化にどう生かすかを考えるシンポジウムが21日、新潟市中央区の新潟日報メディアシップで開かれた。研究者が講演したほか、企業による製品開発の事例紹介、パネルディスカッションなどが行われた。新潟市と新潟日報社が主催し、約200人が参加した。

ペロブスカイトは結晶構造の名前で、ペロブスカイト太陽電池はこの構造を持つ材料で作られる。日本発の技術で、特にフィルム型では日本が技術的に世界をリードしているとされる。

基調講演で東京大先端科学技術研究センター教授の瀬川浩司さんは、ペロブスカイト太陽電池は「軽量で柔軟性があり、発電効率が低い」と特徴を説明した。ビルや家の壁、窓のほか、耐荷重の値が小さい屋根の上などにも設置できることをメリットに挙げた。

また、求められる役割は「従来型の太陽光パネルと置き換えるのではなく、従来型が設置でき

ない場所に置くことだ」と強調した。

ペロブスカイト太陽電池の主要原料であるヨウ素は、日本が世界2位の生産国。本県の生産量は国内で千葉県に次いで2番目に多い。パネルディスカッションでは、県内で関連産業を展開する可能性などについて意見が交わされた。

北村製作所(新潟市江南区)の米本英喜さんは、ペロブスカイト太陽電池の活用、普及に向けた県外プロジェクトに参画していることを紹介。その上で「新潟で生産されるヨウ素を活用し、製品の製造まで新潟の企業で完結できたらほかの地域にはない強みになるのではないかと話した。

東大先端研の瀬川さんは「将来の導入目標を考えると、一貫して生産する拠点が必要となる。新潟に誘致してほしい」と提言した。

来場した新潟市西区の無職、中村利明さん(68)は「再生可能エネルギーを拡大する上で期待できる技術だと思う」と話した。

「ペロブスカイト太陽電池の将来性など考える」
中央区で研究者らシンポジウム